《論文博士要旨》

日中古代仏教工芸史研究

加　島　　勝 *

序説

本論文は、日本及び中国の古代（具体的には日本の飛鳥時代から平安時代、中国の南北朝時代から唐時代）における仏教工芸品を主たる考察の対象とし、その製作年代や製作地などに関して様式論に基づく比較作品研究の手法を用いて明らかにしようとする。考察の対象とする作品には法隆寺献納宝物や正倉院宝物中の仏教工芸品が数多く含まれている。両宝物の仏教工芸品は従来その製作地をめぐって日本、中国、韓半島のいずれであるかかならずしも明確化されているとはいえず、この点に大きな課題がある。本研究ではこの課題に対して長年実施してきた中国での実査の成果を援用しながら可能な限り考察を深めてみたい。論文題目を「日中古代仏教工芸史研究」とした所以である。

第１章　仏舎利の荘厳

中国における舎利容器は、大谷探検隊将来品をはじめ西域では円筒形の身に円錐形の蓋を伴う帽子箱形の合子が定型化し、いっぽう唐時代の中原地方では長安近郊の慶山寺塔址出土品のような棺形舎利容器が多いことが知られている。中国の舎利容器はいつ、どの地域で帽子箱形から棺形へと変化したのか、その形式変遷を新疆ウィグル自治区から甘粛省を経て長安へいたる範囲の中で検討した。その結果、中国の舎利容器は、西域の帽子形舎利容器は中原地方では採用されず、則天武后が延載元年（694）に諸州に建立するよう命じた大雲寺の一つ涇州大雲寺の窖室で発見された棺形舎利容器が最も早い例として、これ以降唐時代の舎利容器は棺形に定形化していったことを論じた。

第２章　法隆寺献納宝物灌頂幡に関する考察

（１）仏幡の役割　仏幡が懸垂される場所や方法に着目して、法隆寺献納宝物灌頂幡の用途や荘厳の意味について考察した。その結果灌頂幡は堂内ではなく寺院の境内など屋外に懸けられたもので、目印・標識といった仏幡本来の用途とは別に、再建法隆寺の金堂造営の発願や落慶などの法会に際して掲げられた可能性について論じた。

（２）灌頂幡の坪堺金具と百済観音の装飾金具　百済観音の装飾金具が法隆寺献納宝物中の灌頂幡の縁金具と文様・製作技法の上できわめて緊密な関係にあるという新知見を提示し、その事実から派生する両作品の製作年代・製作者・製作環境等の諸問題に関して考察した。その結果、灌頂幡の製作は670年代から680年代頃と推定され、再建法隆寺金堂に関わる法会に際して施入された可能性が高いと結論付けた。

（３）灌頂幡模造品製作と新たに得られた知見　灌頂幡は経年による損傷が著しく、将来的に修理を必要とすることから、東京国立博物館ではその具体的方法を検討する一助として平成 8 年度（1997）から11年度（1999）にかけて原寸大の模造品を製作した。本稿はその内容を報告し、模造品製作の過程でえた新知見についても考察をくわえた。その結果、灌頂幡の規格に「古韓尺」と仮称される唐尺以前の尺度が用いられていること、原図を銅板に転写する際の具体的な方法、大幡の製作当初の連結状態、透かし彫りに糸鋸状工具が用いられていた可能性が高いこと等を明らかにした。

第３章　香供養具に関する考察

（１）正倉院宝物の鵲尾形柄香炉　正倉院宝物の鵲尾形柄香炉は、その形姿が法隆寺献納宝物の鵲

*H25年度　大正大学　文学部　歴史学科　教授

尾形柄香炉に近いことから古様を示すとの指摘はあったが、その具体的な製作地や製作年代を確定するにはいたっていなかった。本稿は同柄香炉の形式的特徴を詳細に比較検討し、飛鳥時代の製作であることを明らかにし、正倉院宝物には赤漆文欟木厨子や白瑠璃碗の他にも、天平以前の宝物が含まれていることを論じた。

（2）法隆寺献納宝物の鵲尾形柄香炉の製作地・製作年代の再検討　法隆寺献納宝物の鵲尾形柄香炉はわが国に現存する柄香炉の最古の作例である。本柄香炉をめぐって論議されてきたことに資財帳に「鍮石」と記される材質と火炉の座裏に記された針書銘の解釈の問題がある。本節では銅と亜鉛の合金である真鍮が飛鳥時代にすでにわが国に存在したとの近年の調査結果にもとづき、本柄香炉が真鍮製であることを論じた。また座裏の針書き銘に関して韓国・慶州皇南大塚出土品の銘文との比較から「帯方」と読めることを指摘し、本柄香炉が聖徳太子の仏教の師であった高句麗僧慧慈の持物であったとの寺伝通り、慧慈が推古 3 年（595）の来日時に携えてきた 6 世紀製作のものである可能性を論じた。

（3）獅子鎮柄香炉と瓶鎮柄香炉　わが国の柄香炉は奈良時代には獅子鎮柄香炉が盛行し、瓶鎮柄香炉は平安時代に日本で創始されたと考えられてきた。本節では近年中国や韓国で発見された新資料の実査を通し、獅子鎮柄香炉と瓶鎮柄香炉は鎮子以外の火炉や柄など他の部分は同形式を示すことから、瓶鎮柄香炉はわが国で創始されたものでなく、その源流が唐時代の中国にあり、獅子鎮柄香炉と併存して用いられていたことを明らかにした。

（4）蓮華形柄香炉　蓮華形柄香炉は従来、鎌倉時代になって日本で創始された形式と考えられてきた。本節では台北・国立故宮博物院蔵の宋代の作例や韓国国立中央博物館蔵の高麗時代・熙寧 10 年（1077）の作例との比較から、蓮華形柄香炉の源流が中国に求められることを論じた。

（5）正倉院宝物赤銅合子丙について　正倉院宝物中に数ある脚付鋺の一つである赤銅合子丙は、仏塔の相輪をかたどった鈕をもつ蓋と下方に台脚を付けた身からなる合口造りの合子である。本節では中国の石窟寺院等の絵画・彫刻資料等から、その用途に舎利容器と香合の二つが考えられることを指摘し、前者はピプラファー出土の傘蓋形鈕を付けた球形舎利容器の形式的伝統を踏まえたもので、後者は柄香炉とともに用いられる可能性が高いことを示した。

第４章　飲食供養具に関する考察

（1）浄瓶と胡瓶　飲食供養具の一つ水瓶は比丘十八物に数えられることからわかるように、古来僧侶の必須の持持であった。本節では天平 19 年（747）の『大安寺伽藍縁起并流記資財帳』に記載される漢軍持と胡軍持がそれぞれ浄瓶と胡瓶に相当し、それぞれがどのような形態の水瓶であったか現存作例に照らして論じた。

（2）ペガサスの尾から見た竜首水瓶の製作年代　法隆寺献納宝物の竜首水瓶は中野政樹氏の研究により 7 世紀半ば頃に遡る日本 製とすることが定説化している。これに対し、胴部に描かれたペガサスの尾の表現に着目すると、それが 7 世紀末から 8 世紀初め頃に中国から日本に伝えられた植物文を採用している可能性が高いことから、同水瓶の製作も 7 世紀末から 8 世紀初め頃とみなされることを論じた。

（3）長頸瓶―棗形水瓶と柘榴形水瓶―　前節と同じく『大安寺資財帳』に記載される「棗瓶」と「柘榴瓶」が法隆寺献納宝物中の胴部が棗形を呈したものと蕪形を呈した 2 種類の長頸瓶に相当し、中国北魏時代の豪族封魔奴墓出土品から両者が同じ時代に用いられたものであることを論じた。

第５章　法隆寺献納宝物海磯鏡の製作地

法隆寺献納宝物中に 2 面ある海磯鏡は天平 19 年（747）の『法隆寺伽藍縁起并流記資財帳』に天平 8 年（736）に光明皇后が法隆寺に奉納した由緒正しい鏡であるが、製作地、製作年代、製作技

*H25 年度　大正大学　文学部　歴史学科　教授

法をめぐってさまざまに論議されてきた。本節では海磯文と呼ばれる文様の構成を正倉院宝物中の作例など中国製の同文鏡と比較し、鏡面に対する山岳表現の天地が逆になるなど中国製の海磯鏡には見られない文様構成を指摘し、本2面の鏡が日本製とみなされることを論じた。

第6章　古代の金工技法

（1）複連点文技法と法隆寺再建期の美術　法隆寺献納宝物中の金銅仏等法隆寺再建期の美術工芸品にしばしば認められる複連点文鏨を用いた加飾技法の源流が中国南北朝時代から唐時代にあることを論じ、さらにより直接的には武寧王陵出土の承台付有蓋鋺（銅托銀盞）をはじめとする韓半島の金属製品に求められることを明らかにした。

（2）華原磬の獅子と竜　奈良興福寺蔵の華原磬の製作年代、製作事情の問題について、基台の獅子と架台の四竜の作風を鋳造技法と彫金技法の面から詳細に比較検討し、前者が奈良時代の興福寺西金堂創建当初からのもので、後者は鎌倉時代・治承4年（1180）の兵火後の同堂復興期に製作された事情を論じた。

第7章　上東門院彰子埋納の金銀鍍宝相華唐草文経箱

わが国の11世紀前半の工芸品を代表する上東門院彰子埋納の経箱について、箱の形態、台脚の有無、装飾文様の面から日中の類例との比較検討を行ないながら考察をくわえた。その結果、彰子埋納の本経箱は正倉院宝物中に経箱に見られる源流が盛唐期の中国に求められる伝統的な要素に、法門寺塔基の地宮発見の晩唐期の中国に求められる新来の要素を取り入れたものであることを論じた。

第8章　中尊寺金色堂の現状と明治の模写図

大治元年（1124）に上棟された中尊寺金色堂内の三つの須弥壇は、寺伝では中央壇が藤原清衡のための、西北壇が二代基衡のための、西南壇が三代秀衡のための壇とされてきたが、昭和25年（1150）に実施された三代の遺体調査の結果、西南壇に基衡の、西北壇に秀衡の遺体が安置されていたことから寺伝には錯誤があるとされた。本章では三壇の製作当初の状態を東京国立博物館保管の明治30年（1897）修理時の模写を援用して復元し、これに基づいて須弥壇の製作順序の問題を孔雀金具や宝相華文の意匠、螺鈿や八双金具の製作技法等の面から考察をくわえたもので、その結果三壇は寺伝通りの造営順序であることを明らかにした。

第9章　法隆寺献納宝物舎利塔の修理と新発見の墨書銘

法隆寺献納宝物の舎利塔は保延4年（1138）の墨書銘を有する平安時代の宝塔形式の舎利塔の基準作として著名である。しかし経年による損傷が著しいことから、東京国立博物館では平成10年度（1998）に修理を行なった。本稿はその過程で新たに発見された墨書銘から、本品が保延4年に修理されたことが判明し、その製作が11世紀に遡ることを論じた。

*H25年度　大正大学　文学部　歴史学科　教授